

フォーラム 現代社会学

Kansai Sociological Review

第9号 2010

特集Ⅰ 包摂と排除のアポリア

—多文化状況でのエスニック・アイデンティティ—

はじめに

沢田善太郎

「日本人」と「外国人」の間

—コリア系日本人という試み—

佐々木てる

在日フィリピン人の介護労働参入

—資格取得の動機と職場での人間関係を中心に—

高畑 幸

コメント

谷 富夫

コメント —包摂と排除の新たな局面—

安里 和晃

特集Ⅱ 演繹的 sociology の「復権」

はじめに

高坂 健次

差別をめぐる相互行為のダイナミクス

—演繹的 sociology のコアとしての数理社会学—

浜田 宏

数理社会学・リベラル・公共社会学

—プロ社会学者は社会のために何が言えるのか?—

太郎 丸博

理論の外へ、もしくは〈対話〉としての社会学

三浦耕吉郎

コメント

高瀬 武典

コメント

吉川 徹

論文

現代中国におけるスポーツと社会階層

—都市の武術学校への転入学者を事例に—

池本 淳一

現代日本社会における「近代家族の揺らぎ」と親密性の変容

—「婦人公論」における独身・非婚をめぐる言説から—

桶川 泰

芸術至上主義の社会学

—ベートーヴェンにみる芸術性と商品性の関係—

川本 彩花

社会主義体制における現実の表象

—ポーランドドキュメンタリー映画の検討から—

菅原 祥

関西社会学会

▼特集Ⅰ 包摂と排除のアポリア	3
——多文化状況でのエスニック・アイデンティティ——	
はじめに	沢田善太郎 3
「日本人」と「外国人」の間	佐々木てる 9
——コリア系日本人という試み——	
在日フィリピン人の介護労働参入	高畑 幸 20
——資格取得の動機と職場での人間関係を中心に——	
コメント	谷 富夫 31
コメント	安里 和晃 34
——包摂と排除の新たな局面——	
▼特集Ⅱ 演繹的社会学の「復権」	38
はじめに	高坂 健次 38
差別をめぐる相互行為のダイナミクス	浜田 宏 42
——演繹的 sociology のコアとしての数理社会学——	
数理社会学・リベラル・公共社会学	太郎丸 博 52
——プロ社会学者は社会のために何が言えるのか?——	
理論の外へ、もしくは〈対話〉としての社会学	三浦耕吉郎 60
コメント	高瀬 武典 69
コメント	吉川 徹 72
▼論文	75
現代中国におけるスポーツと社会階層	池本 淳一 75
——都市の武術学校への転入学者を事例に——	
現代日本社会における「近代家族の揺らぎ」と親密性の変容	桶川 泰 88
——『婦人公論』における独身・非婚をめぐる言説から——	
芸術至上主義の社会学	川本 彩花 101
——ベートーヴェンにみる芸術性と商品性の関係——	
社会主義体制における現実の表象	菅原 祥 113
——ポーランド・ドキュメンタリー映画の検討から——	
▼ Abstracts	126

▼学会活動報告	135
2009 年度大会プログラム	135
▽諸規定	141
▽編集後記	蘭 由岐子 143

数理社会学・リベラル・公共社会学

——プロ社会学者は社会のために何が言えるのか？——



太郎丸 博

要 旨 》

本稿では、まず日本では数理社会学が不人気である事実を確認し、その理由を説明する仮説として、リベラル仮説と伝統的公共性仮説を検討する。リベラル仮説によると、社会学者の多くはリベラルであるが、マイノリティの生活世界を描くことを通して、抑圧の実態を告発し、受苦への共感を誘う戦略がしばしばとられる。そのため、社会学者の多くは抽象的で単純化された議論を嫌う。そのことが数理社会学の忌避につながる。伝統的公共性仮説によると、日本の社会学では伝統的公共社会学が主流であるが、伝統的公共性の領域では、厳密だが煩雑な論理よりも、多少曖昧でもわかりやすいストーリーが好まれる。それが数理社会学の忌避につながる。このような数理社会学の忌避の原因はプロ社会学の衰退の原因でもあり、プロ社会学の衰退は、リベラルと伝統的公共社会学の基盤をも掘り崩すものである。それゆえ、数理社会学を中心としたプロ社会学の再生こそ日本の社会学の重要な課題なのである。

キーワード 》

生活世界、演繹、社会学的分業、出版

1 問題

——数理社会学はなぜ不人気？

1.1 なぜ数理社会学か？

この論文は、演繹的 sociology の「復権」というセッションの論考として書かれている。それゆえ、本来ならば数理社会学ではなく、演繹的 sociology をメインテーマとすべきである。しかし、あえて問題をずらすのには戦略的な理由がある。すなわち、社会学では演繹と帰納を対立的にとらえるのは生産的ではなく、両者は相補的であると考えるのが、標準的

だからである (Merton 1957=1961; Berger & Zelditch 1993; 高坂 2000; Jasso 2004; Berger et al. 2005)。演繹と帰納を対立させたうえで、演繹の復権を唱えても、「どちらも大事」というこれまで何度も繰り返されてきた平凡な結論を再びなぞる以上の議論は難しい。

一方、問題を数理社会学へとずらしても、今回のセッションの趣旨から大きくずれた議論にはならないであろう。そして、数理社会学をとりまく日本社会学の現状を考察することで、私たち日本の社会学者が置かれている状況のある側面を、クリアーに示すことができると私は考える。本稿では「数理社会学は

なぜ不人気か」という問題に対して、社会学はリベラルであること、そして日本では伝統的な公共社会学が支配的であることを示したうえで、それが数理社会学を不人気にしている要因であることを主張する。しかし、これまでのリベラルや伝統的公共性の戦略はいまや限界に達しており、数理社会学を中心としたプロ社会学との相補的な関係が必要であることを論じる。

1.2 数理社会学はなぜ不人気か？

他国の状況は詳しくわからないが、日本においては数理社会学は不人気である。図1は、ホームページから簡単に会員数がわかる社会

学関連の学会の会員数（2009年5月現在）である。数理社会学会、家族社会学会の半分、教育社会学会の4分の1以下の規模である。もちろん数理社会学会と同程度の規模の社会学関連の学会はあるだろうが、数理社会学会を決して大きな規模でないことがわかるだろう。

もう1つ、数理社会学が不人気であるという証拠を示そう。図2は、『社会学評論』と『ソシオロジ』に掲載された論文を、用いた主要な方法に従って分類したものである（太郎丸ほか2009）。狭義の数理社会学の数が一貫して非常に少ないことがわかるだろう。計量社会学の数はある程度存在するが、せいぜい全体の2割程度で、学説研究や事例研究（歴史

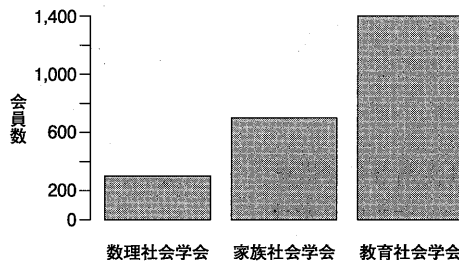


図1 3つの社会学関連学会の会員の概数

* それぞれの学会のホームページまたは機関誌より。2009年5月現在。

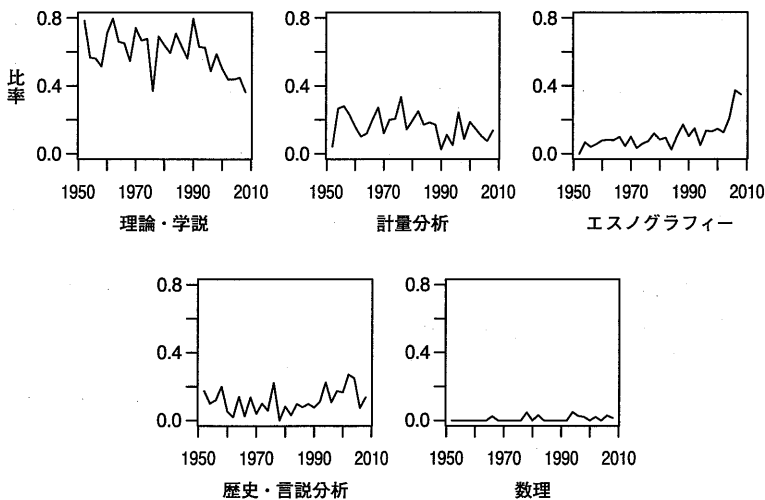


図2 1952-2008, 社会学の方法の推移

* 太郎丸ほか（2009）より転載。

社会学、エスノグラフィーなど)に比べると規模が小さいことがわかる¹⁾。しかも、この「計量分析」は、単純なクロス表レベルの分析も含めているので、もっと高度な統計手法を使った研究の数はいくつと少ないと見るべきである。

2 考えられる仮説

それではなぜ数理社会学は不人気なのだろうか。以下の4つの仮説を考えてみた。仮説の名前や定義は私が便宜的に作ったものである。

1. 文系仮説
2. パラダイム仮説
3. リベラル仮説
4. 伝統的公共性仮説

文系仮説とは、「社会学は文系なので数学の苦手な研究者や学生が多い。それゆえ数理社会学は不人気である」とする仮説である。この仮説は、部分的には正しいかもしれないが、説得力がない。なぜなら経済学も文系であるが、数理的な理論・実証が主流である。また心理学も実証面は統計学が主流である。単に文系は数学が苦手という理由ならば、これらの学問分野でも数理的な手法は不人気なはずであるが、そうはなっていない。

パラダイム仮説とは「数理社会学は歴史的に日が浅く、範例(paradigm)となるような研究がまだ少ない。そのため、不人気なのである」とする仮説である。T. S. Kuhn (1970=1971)によれば、このような範例の存在が、理論や方法の発展に大きな役割を果たす。数理社会学が不人気であるとするれば、範例の欠如が原因ではないか、という仮説が考えられる。しかし、これも数理社会学内部の視点から見れば説得力がない。なぜなら、数理社会

学には、範例となるような優れた研究がいくつと存在するからである(土場ほか編2004)。それは数理社会学を学んでいない人には見えないだけのことである。

他方で、数理社会学外部の視点から見れば次のように言えるだろう。ある研究が範例かどうかは、それを模倣する研究がその後多数発生したかどうかでしかわからないので、数理社会学が不人気であれば(すなわち模倣する研究が少なければ)必ず範例は存在しないということになってしまう。つまり、被説明変数(不人気であるかどうか)と説明変数(範例の存在)を操作的には分離できない(どちらも模倣研究の数で操作化)ので、実証的にはトートロジカルな議論しかできないのである。それゆえ、仮に範例が存在しないのが原因であったとしても、なぜ範例が存在しないのか考えたほうが生産的であろう。

私がもっともらしいと考えているのは、リベラル仮説と伝統的公共性仮説である。以下では両者について論じていこう。

3 リベラル仮説

リベラル仮説の概要をいくつかの命題に分けて述べると、以下のようになるだろう。

1. 社会学者は政治的にリベラルである
2. 政治的リベラルは、抽象的で単純なモデルを嫌う
3. 数理社会学は単純なモデルを使う
4. 社会学者=政治的リベラルは数理社会学を嫌う

これらの命題をそれぞれ見ていこう。

3.1 リベラルとしての社会学

社会学の主流派が政治的にリベラル(以下

リベラルと省略)であることは、社会学会においては暗黙の前提となっている。この論文の中では、「リベラルとは、社会の下層やマイノリティ、社会的弱者(以下では一括してマイノリティと略称)への共感をもとに、彼らをエンパワーしたり、福祉を充実させようとする政治的立場、あるいはそのような立場をとる人々のことである」と定義しておく。Collins (1994=1997)によれば、社会学はその起源からリベラルであった。「社会学は、もっぱら政治的イデオロギーの運動及び改革の運動を通して独立したアイデンティティを得た……(中略)……社会学はときには伝統を評価したが、福祉型の改革に関心を寄せる自由主義者(小文字の liberal)に依存した」(Collins 1994=1997: 34)。小文字の liberal とは、自由主義経済の支持者を大文字の Liberal とよんでいるので、両者を区別するための工夫である。小文字の liberalこそ本稿でいうリベラルである。マルクス主義、ミルズ、ギデンズ、ブルデュー、シカゴ学派、ラベリング理論、資源動員論以降の社会運動論、フェミニズム、解放社会学、環境社会学、社会学の主流派はリベラルであったと考えられる。

3.2 リベラルの生活世界戦略

リベラルは、数理社会学の抽象的で単純なモデルを嫌う傾向がある。なぜならリベラルがしばしば用いる生活世界戦略にとっては、抽象的で単純なモデルは邪魔にこそなれ、役には立たないからである。生活世界戦略とは私の造語で、マイノリティの生活世界を記述=構成することで、受苦への共感と不正な社会構造への反感を引き寄せようとする戦略のことである。リベラルな政策や運動を推進するためには、一般市民の支持が不可欠である。そのためにマイノリティが置かれている苦境とその意味を伝え、人々の共感を引き寄せる

ことがリベラルにとって有効な手段になる。生活世界の構成こそ、人々の共感を引き寄せる手段なのである。例えば Friedan (1963=1986)は、郊外で暮らす中産階級の主婦の生活がいかに陰鬱であるかを描いて見せた。一見幸せなはずのその生活は、当事者の生活世界の中では決して幸せではないことを説得的に描きだしたのであった。

あるいは、支配的な文化や慣習に流されることなく果敢に生きる人々をマイノリティの中に見出し、彼らをヒーロー/ヒロイン(あるいはアンチ・ヒーロー/ヒロイン)として描くことも(Wolfe 1995)、生活世界戦略の一種である。例えば、Willis (1977=1996)の描く「野郎ども」こそ、資本制に抵抗するアンチ・ヒーローであり、彼らを描くことを通して、体制への順応を促す学校や中産階級に対する批判を導こうとするのである。例外はあるもののリベラルの多くが生活世界戦略を好んで用いている。シカゴ学派が都市下層のエスノグラフィーでそのような仕事をしたのはよく知られているし、日本のフェミニズムや環境社会学、解放社会学も同様の戦略をしばしば用いている²⁾。

生活世界戦略には、マジョリティが自明視する「世界」を相対化する効果がある。マイノリティの生活世界の構成とは、リアリティが多元的である(Berger & Luckmann 1967=1977)ことをマジョリティに知らしめ、異質な他者の理解を促すことである(Rorty 1982=1994)。言い換えれば、マジョリティにとってはごく普通の日常世界が、マイノリティにとっては残酷極まりない世界であることを主張することこそ、リベラルのしばしば用いる戦略なのである(Rorty 1989=2000)。

3.3 数理社会学の単純化戦略

このような生活世界戦略にとって、必要なのは具体的なストーリーであって、抽象的な

モデルや数字ではない。抽象的だと共感に結びつきにくいからである。しかし、数理社会学は抽象的にならざるをえないし、しばしば単純化した議論のほうが無効である (Fararo1989=1996; 高坂 2000)。数理モデルは一見複雑に見えるかもしれないが、基本的な仮定はしばしば非常に単純化されている。行為の選択肢は2つに切り詰められていたり、行為者間の関係は「あるか」「ないか」の2種類で、質は問題にされなかったりする。

数学を使うことで厳密な推論とその演繹的な展開が可能になるが、日常言語ならばごまかしたり省略できるようなことをごまかせないため、数理社会学では、論証が煩雑になりやすい。そのため、日常言語での議論の場合よりも、議論を単純化しないと、煩雑すぎて内容を理解できなくなってしまうのである³⁾。このような数理社会学は、厳密な推論と意外な命題の導出を可能にするが、生活世界戦略の役には立たないのである。

4 伝統的公共性仮説

伝統的公共性仮説は、下記のように定式化できる。

1. 日本社会学の多数派は伝統的公共社会学を好む
2. 伝統的公共社会学には、数理社会学は向かない
3. それゆえ、日本社会学の多数派は数理社会学を好まない

4.1 伝統的公共社会学

伝統的公共性とは、Burawoy (2005) の用語である。Burawoy (2005) は、社会学の仕事をも4つに分類し、それらの間での分業について論じている。図3は、その4つを図示し

たものである。聴衆が学者(特に社会学者)か、学者以外かでまず分類し、さらに研究が道具的か再帰的かでさらに分類し4類型を作っている。公共社会学とは、学者以外の人々に、再帰的なメッセージを送る研究のことである。再帰的とは、これまでの自明なものの見方や考え方を反省的にとらえ返すような研究ということになる⁴⁾。

	学者向け	一般向け
道具的	プロ社会学	政策社会学
再帰的	批判社会学	公共社会学

図3 社会学的分業

* Burawoy (2005) より。

公共社会学は、一般の聴衆とのかかわり方に応じて、伝統的公共社会学と有機的公共社会学に分類される (Burawoy 2005)。伝統的公共社会学とは、マスメディアを通じて一方的に公衆にメッセージを発する社会学のことである。これに対して有機的公共社会学は、聴衆と直接対面し、双方向的なコミュニケーションを行う社会学のことである。このような有機的公共社会学の担い手は、名もない多くの社会学者たちであり、彼らは授業や集会での直接的なコミュニケーションを通して、マイノリティや社会運動をエンパワーしてきたという。

Burawoy (2005) によれば、アメリカ社会学はプロ社会学偏重であり、有機的公共社会学がとくに軽視されている。有機的公共社会学を中心に据えて、4つのタイプの社会学が有機的に分業していくことがアメリカ社会学に必要なことである、というのがBurawoy (2005) の主張であった。これに対して、私が言いたいのは「日本社会学は伝統的公共社会学偏重であり、プロ社会学が軽視されている。それゆえ、プロ社会学を強化することが日本の社会学には必要である」ということである。それは第5節で述べるので、以下では、

伝統的公共性偏重とそれが数理社会学に及ぼす影響について論じる。

4.2 日本社会学は伝統的公共性が好き

日本社会学の多数派は伝統的公共社会学が大好きである。動かぬ証拠は示せないが、私の信じるところを以下では述べよう。伝統的公共社会学はマスメディアを通して一方的に公衆にメッセージを発すると言ったが、その主要なメディアは著書であろう。日本社会学の場合、雑誌論文よりは著書のほうが高く評価され、参考文献でも雑誌論文よりは著書が好まれる傾向がある。もちろん著書＝伝統的公共社会学とみなすのは乱暴すぎる。日本の社会学者の多くは、伝統的公共社会学ではなく、著書というまとまった分量のメッセージを伝えられるメディアを好むだけなのかもしれない。しかし、近年では純粋な学術書（つまり専門家以外は理解できない本）の出版は難しくなっているといわれており、専門家以外も読めるように配慮した著書が多いのは確かだろう。つまり、著書＝伝統的公共社会学、に近い状況が現代日本の出版事情ではないだろうか。また、米国の場合、学術書の出版のためには専門家の審査にパスする必要があるが（Clemens et al. 1995）、日本の場合、出版社の意向だけで出版の可否が決まるため、より一般読者層向けの本が出版されやすくなるという事情もあるであろう。

雑誌論文が、専門を同じくする社会学者以外に読まれることはまれであろうから、雑誌論文こそプロ社会学のメディアといえよう。アメリカ社会学の場合、博士号を持たない大学院生が雑誌論文の第一著者となることはごくまれであるが（Clemens et al. 1995）、日本の雑誌論文は、若手の登竜門という位置づけが強く、教授や准教授クラスの研究者が一般投稿論文を査読付きの雑誌に発表することはまれである（太郎丸 2010）。

4.3 数理社会学と伝統的公共社会学

専門家ではない一般の人々を読者として想定する場合、数理社会学は不利である。数理社会学の論文を読むためには、数学の知識が必要だからである。もちろん数学を使っていなくても内容が簡単とは限らないが、やはり数理社会学のほうがハードルが高いだろう。

そのため、一般の人々を読者として想定する研究者にとっては、数理社会学は忌避すべき方法論となる。伝統的公共社会学にとって必要なのは、わかりやすく、おもしろい研究であって、厳密な論理ではない。一般の人々への訴求力が伝統的公共社会学にとっての重要なバロメータであるとするれば、出版部数の多い著書、売れる本を書ける社会学者こそ、すぐれた伝統的公共社会学者である。伝統的公共社会学がしばしば資本主義に対して批判的なことを書いてきたことを思えば、利潤の大きさと評価されるというのは皮肉であるが、いずれにせよ、社会学者が伝統的公共社会学にこだわり続ける以上、数理社会学は彼らにとって障害にこそなれ、役に立つことはない。

この議論を第3節とあわせて考えれば、日本社会学の多数派はリベラルな伝統的公共性を好むので、数理社会学は不人気なのである。そして、そのことは数理社会学だけでなく、プロ社会学全般にも敷衍できると思われる。すなわち、リベラルと伝統的公共性の偏重は、プロ社会学の衰退につながっている。なぜなら、数理社会学の持つ厳密な論理への志向性は専門家同士の議論の特徴でもあるからである。プロ社会学では、数学を使っていないとしても、より厳密な論理展開や先行研究との整合性、厳格な証拠調べが求められることが多いので議論は煩雑になりやすい。そして、それは生活世界戦略や伝統的公共性にとって桎梏となろう。

以上の議論の中には根拠が薄弱な部分もある

るので確言はできないが、私はリベラル仮説も伝統的公共性仮説も正しいと考えている。リベラルの政治的意図を考えれば、専門家だけに対して語るのではなく、より広い公衆に向けて語ることは確かに理にかなっている。20世紀の間は、こういったスタイルの社会学が戦略的に合理的だったのかもしれない。

5 プロ社会学の可能性

私はリベラルの政治目標を否定する気はないし、生活世界戦略の有効性も伝統的公共社会学の価値も高く評価している。しかし、数理社会学やプロ社会学の軽視がゆきすぎれば、プロ社会学だけでなく、リベラルや伝統的公共社会学の基盤までも掘り崩してしまうだろう。マイノリティの生活世界の構成は、不平等や抑圧を生む社会構造とそのメカニズムの探究、およびそれを是正するための政策論と結びつかなければ、その政治的な有効性は限られている (Shalin 1986)。そういったメカニズムの探究のためには、難解なモデルの構成や煩雑なデータの収集・分析が必要であり、それは非専門家の共感を得られにくいかもしれない。しかし、そういったプロ社会学の仕事は欠いたままで、リベラルの政治目標が多少なりとも達成されるとは思えない。

また、プロ社会学が衰退した結果、社会学は公衆に向けて語るべき知識をほとんど持っていない、という状況が起きているのかもしれない (盛山 2006)。社会学者が現在、公衆に向かって発するメッセージの多くは、社会学者でなくてもわかるような常識的な議論か、「こんな見方もある」といった低レベルの奇をてらった議論ばかりだ、という批判 (マツァリーノ 2007) には、一面の真理が含まれている。私たちが公衆に語るべきメッセージはそんなレベルの議論ではなく、社会学の歴史の中で培われた伝統と厳格な推論に

裏打ちされた確かな知識ではないのだろうか。プロ社会学がやせ細っていることが、けっきょく公共社会学をもやせ細らせてしまうように私には思える。

日本の社会学にとって重要なのは、プロ社会学の再生である。プロ社会学が専門家向けの厳格な論証を重視する社会学であるならば、数理社会学がそこで果たす役割は大きいだろう。そしてそれは、リベラルにとっても伝統的公共性にとっても有益であろう。

注

- 1) 一部では社会調査士制度の導入 (2004 年より認定開始) で計量社会学が増加することを「懸念」する声もあったようだが、今のところ杞憂である。
- 2) 当事者にとっての意味や生活世界を明らかにすることを課題とする場合、その表現形態は学術論文に限定する必要はない。ジャーナリズム、文学、芸術、映画といったジャンルにも、学術研究とは異なる可能性があるだろう。世界制作を行うのは、社会学の専売特許ではないのである (Goodman 1978=2008)。ジャーナリズムと社会学の相互浸透がおこったり、文学社会学やある種のカルチュラル・スタディーズの可能性が探求される背景には、この生活世界戦略の重要性がある。
- 3) 狭義の数理社会学と計量社会学では事情が異なる。計量社会学では、有効性の確認された出来合いの計量モデルを借用できるので、数学的な論証に煩わされることは少ない。また、出来合いの計量モデルは単純な線形加法モデルである場合がほとんどなので、基本的な議論は非常に単純になる (Abell 1987)。
- 4) 私はこのようなパーソンズ風の類型論には否定的である。政策向けの研究は道具的であろうが、プロ社会学の中には「道具的」とはいえないような研究も含まれている。例えば、学説研究の多くはプロ社会学だろうが、道具的とはいえない。それゆえ、図3のような概念図式は、少なくとも日本にはうまく当てはまらない。しかし、プロ社会学と公共社会学の対比は私の議論にも使えるので借用している。

文 献

- Abell, P., 1987, *The Syntax of Social Life: The Theory and Method of Comparative Narratives*, New York: Clarendon Press.
- Berger, J., D. Willer, & M. Zelditch, Jr., 2005, "Theory Programs and Theoretical Problems," *Sociological Theory*, 23(2): 127-55.
- Berger, J. & M. Zelditch, Jr., 1993, "Orienting Strategies and Theory Growth," J. Berger & M. Zelditch, Jr. eds., *Theoretical Research Programs: Studies in the Growth of Theory*, Stanford, Calif.: Stanford University Press, 3-19.
- Berger, P. L. & T. Luckmann, 1967, *The Social Construction of Reality: A Treatise in the Sociology of Knowledge*, Harmondsworth: Penguin. (=1977, 山口節郎訳『日常世界の構成』新曜社.)
- Burawoy, M., 2005, "2004 Presidential Address: For Public Sociology," *American Sociological Review*, 70(1): 4-28.
- Clemens, E. S., W. W. Powell, K. McIlwaine, & D. Okamoto, 1995, "Careers in Print: Books, Journals and Scholarly Reputations," *American Journal of Sociology*, 101(2): 433-94.
- Collins, R., 1994, *Four Sociological Traditions*, New York: Oxford University Press. (=1997, 友枝敏雄訳『ランドル・コリンズが語る社会学の歴史』有斐閣.)
- 土場学・佐藤嘉倫・数土直紀・小林盾・渡辺勉・三隅一人編, 2004, 『社会を〈モデル〉でみる——数理社会学への招待』勁草書房.
- Fararo, T. J., 1989, *The Meaning of General Theoretical Sociology: Tradition and Formalization*, Cambridge: Cambridge University Press. (=1996, 高坂健次訳『一般理論社会学の意味——伝統とフォーマライゼーション』ハーベスト社.)
- Friedan, B., 1963, *The Feminine Mystique*, London: Penguin. (=1986, 三浦富美子訳『新しい女性の創造』大和書房.)
- Goodman, N., 1978, *Ways of Worldmaking*, Indianapolis: Hackett Publishing. (=2008, 菅野盾樹訳『世界制作の方法』ちくま学芸文庫.)
- Jasso, G., 2004, "The Tripartite Structure of Social Science Analysis," *Sociological Theory*, 22(3): 401-31.
- 高坂健次, 2000, 『社会学におけるフォーマル・セオリー——階層イメージに関するFKモデル』ハーベスト社.
- Kuhn, T. S., 1970, *The Structure of Scientific Revolutions*, Chicago: University of Chicago Press. (=1971, 中山茂訳『科学革命の構造』みすず書房.)
- マツァリーノ, バオロ, 2007, 『反社会学講座』ちくま文庫.
- Merton, R. K., [1949] 1957, *Social Theory and Social Structure*, New York: Free Press. (=1961, 森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎訳『社会理論と社会構造』みすず書房.)
- Rorty, R., 1982, *Consequences of Pragmatism: Essays, 1972-1980*, Minneapolis: University of Minnesota Press. (=1994, 室井尚・加藤哲弘・疋茂・吉岡洋・浜日出夫訳『哲学の脱構築——プラグマティズムの帰結』御茶の水書房.)
- , 1989, *Contingency, Irony, and Solidarity*, Cambridge: Cambridge University Press. (=2000, 齋藤純一・大川正彦・山岡龍一訳『偶然性・アイロニー・連帯——リベラル・ユートピアの可能性』岩波書店.)
- 盛山和夫, 2006, 「理論社会学としての公共社会学にむけて」『社会学評論』57(1): 92-108.
- Shalin, D. N., 1986, "Pragmatism and Social Interactionism," *American Sociological Review*, 51(1): 9-29.
- 太郎丸博, 2010, 「投稿論文の査読をめぐる不満とコンセンサスの不在」『ソシオロジ』54(3): 121-6.
- 太郎丸博・阪口祐介・宮田尚子, 2009, 「ソシオロジと社会学評論に見る社会学の方法のトレンド 1952-2008」<http://tarohmaru.web.fc2.com/documents/journal.pdf>
- Willis, P. E., 1977, *Learning to Labour*, Aldershot: Ashgate. (=1996, 熊沢誠・山田潤訳『ハマータウンの野郎ども』ちくま学芸文庫.)
- Wolfe, A., 1995, "Realism and Romanticism in Sociology," *Society*, 32(2): 56-63.

(京都大学文学研究科准教授)

E-mail: tarohmaru.h@hs2.ecs.kyoto-u.ac.jp

Kansai Sociological Review

Vol. 9 2010

Official Journal of Kansai Sociological Association

Special Section I The Aporia of Inclusion and Exclusion: The Ethnic Identities in Multicultural Society

- | | |
|---|----------------|
| Introduction | Zentaro SAWADA |
| Deconstruction of Japanese Nationality:
The Korean-Japanese Viewpoint | Teru SASAKI |
| Immigrant Filipino Caregivers in Japan:
Their Motivation for License Acquisition, and
Some Issues at Their Work Place | Sachi TAKAHATA |
| Commentaries | Tomio TANI |
| Commentaries | Wako ASATO |

Special Section II "Restitution" of Deductive Sociology

- | | |
|--|-------------------|
| Introduction | Kenji KOSAKA |
| A Model of Discrimination Interaction:
Mathematical Sociology as the Core of Deductive Sociology | Hiroshi HAMADA |
| Mathematical Sociology, Liberalism and Public Sociology:
What Can Professional Sociologists Say to Society? | Hiroshi TAROHMARU |
| Beyond Theory: The Sociology of Dialogue | Kōkichiō MIURA |
| Commentaries | Takenori TAKASE |
| Commentaries | Toru KIKKAWA |

Articles

- | | |
|---|-----------------|
| A Study of the Relationship between Sports and
Social Stratum in Modern China:
Transfers from Public Village Schools to Wushu (Kong-fu)
School in Cities | Junichi IKEMOTO |
| Fluctuation of the Modern Family and the Transformation of
Intimacy in Contemporary Japan:
Discourse on Single Status and Non-marriage in <i>Fujinkoron</i> | Yasushi OKEGAWA |
| The Sociology of "Art for Art's Sake":
The Relationship between Art and Commodification
in Beethoven | Ayaka KAWAMOTO |
| Representation of "Reality" in Socialist Society:
An Analysis of Polish Documentary Films in the 1950's | Sho SUGAWARA |

発行=関西社会学会
発売=世界思想社

ISBN978-4-7907-1484-2
C3036 ¥1900E



9784790714842

定価 本体1900円 +税

ISSN 1347-4057



1923036019008